

# 廣大無碍のこころ

——入出二門の源泉——

安 田 理 深

『入出二門偈』というのは「願生偈」を引いてありますけれど、「願生偈」の偈文でなしに解義分の内容なんです。親鸞は「願生偈」を一心の華文と呼び、一心偈と見ておられる。願生というのも一心の内容であって、一心偈と言っても別に変わったことはないですけれど、これは三心の本願に対して一心の信、信樂ですね、そういう関係を以て御覧になった。まあそこに「願生偈」というものが非常に大きな位置を持っている。一心という言葉だけなら『阿弥陀經』にもあるんですけれども、『阿弥陀經』の一心じゃなしに、わざわざ「願生偈」というものをもって本願に照応してある。そういう高い位置というものを「願生偈」に見出してあるのも、同じ一心と言っても純粹な一心というのが表わされているからだと思うのです。三心即一心の一心といって、三心の外に別に願をおこしたんじゃない。三心というものが一心として成就してきとる。三心というのは如来の願心です。それが天親菩薩の上に一心として成就してきとる。親鸞はこういうような意義を「願生偈」の上に見出している。三国の高僧というと、曇鸞大師が三經一論と言われたんですから、「願生偈」というものが、インドにおける唯一の『無量壽經』の論だということを知っているんですけれど、しかしその三心に対する一心というような意味で「優婆提舍願生偈」というのが流れとるんです。優婆提舍というのが三心と一心についての問答であったと、そういう具合に優婆提舍というのがはっきりしてきたん

です。だから『教行信証』は「願生偈」の事業を継承した優婆提舎だという親鸞の自覚があるんでしよう。

まあ三心の願を一心と受けられたけれど、親鸞は逆に一心の背景としての三心を明らかにしていく。一心は天親菩薩の信心ですけれども、三心は如来の心ですね。その如来の心を明らかにしていく。こういうところに優婆提舎といえますか、大胆不敵の心があります。人間が如来の心を明らかにするという、人間が人間を超えた心を明らかにするというのは大胆な試みです。自分の信心というものを明らかにするんじゃない。信心から遡って、信心から通して如来の本願に目を覚ました心を通して、その如来の御心を明らかにしていく。これは今だかつてない大胆な試みというような、つまりもっと言えば、有限な人間がかえって永遠の心を明らかにしていくというようなことが親鸞にはあるんです。

そういうように、問答には『阿弥陀経』の一心なんかを持ってこずに、天親菩薩の「優婆提舎願生偈」といわれた一心というものを受けて本願の三心というものに対応してある。それは優婆提舎ということがある為だろうと思うんです。しかしその一心というのが、『論』、『論註』の意義といえますか、天親菩薩が『浄土論』を作られたという純粹無碍の意義というのが何であるかと言えば、『教行信証』の「証卷」の一番終りに出るとるように、「論主は広大無碍の一心を宣布して、あまねく雑染堪忍の群萌を開化す」とこういう言葉で表わしてある。

だけどこの一心というのは広大無碍の一心というんだ。そして宣布すると言ってある。宣布するというのは親鸞から言うんです。天親菩薩が宣布したと言ったわけじゃないですね。天親菩薩自身は、ひとえに雑染堪忍の群萌に帰って、そして如来の本願をいただくだけだ。まあもとを遡れば法蔵菩薩がそうですね。法蔵菩薩は始めから秀れたかたと言っているんじゃないんです。法蔵菩薩は如来の因位というその因位というのは秀れた因位じゃないんです。人間の例から言っても、始めから偉い人というのはありません。あんまり子供の時に老成するのはたいしたことない。子供の時にばやっとしとるのが、これが偉い者になってくるというようなことにもなる。漢垂れ小僧というものが、それが

かえって見込みあるんです。老成た子供なんか速成で早く大人になってしまふ。これは諭えですけども、そういうこともあって、やっぱり如来の因位というような、法蔵菩薩は偉い人じゃない。観音、勢至というようなものは偉い菩薩でしょう。観音、勢至は誰でも知っておった。阿弥陀仏の脇侍ですけども、阿弥陀を離れても皆知っていません。観音さんといえれば日本でも一番流行っとるでしょう。それから文殊、普賢もある。『華嚴経』なんかは文殊、普賢と、そして『法華経』になると観音というような菩薩が出てくる。まあ有名ですわね。

法蔵菩薩はあんまり言わんです。『無量寿経』を離れて誰も言うものはおらん。そうでしょう。だからそれから言ってみると法蔵菩薩というのはあんまり有名でない菩薩に達しない。阿弥陀仏になったから皆びっくりしたんです。阿弥陀仏になったから皆目を開いた。尽十方というものを包むような如来、生きとし生けるものの心のすみずみまで流れる光である如来。尽十方とは誰かには無いというんじゃない。どんな善悪をもこえて衆生の中に光り輝くというような意味になる。だから諸仏が称讚する。諸仏が称讚するといくら阿弥陀仏が有名になったんです。有名の名が名号という。それが十方世界に普く聞える、だから「重誓名声聞十方」という。十方に名が響き渡るとると、阿弥陀仏は有名な仏さんになったんですけど、因位の方は誰も知らん。法蔵菩薩が阿弥陀仏になってみて法蔵菩薩は偉い菩薩だということになったんです。その仏さんの因位は偉くないんですね。これは大事なことをいうんじゃないですかね。

誰も知らんものがないのが阿弥陀仏ですけど、誰も知らんのが法蔵菩薩というんです。それが成就して誰も知らんものがないようになった。こういう関係なんですわね。誰れでも知られんというのは凡夫です。凡夫というのが如来の因位です。阿弥陀仏は凡夫を因位とされた。因位のない仏様というのではない。他の仏にも因位というはあるんですけど、しかし阿弥陀仏においては本願の生起といてですね、極重悪人みたいなものを標準として、衆生としてたてる。因位が非常に徹底しているんです。だから諸仏を超えた阿弥陀仏が、諸仏によって称讚される。それは阿

弥陀仏の因位が諸仏の因位にも超えて深かったんでしよう。

だから「いづれの行もおよびがたき身」ということが『歎異抄』にあるが、そういうところが本当の因位という、そういうところに如来が因位という立場をおかれた。いづれの行も及ぶ見込みがあるというんじゃないですね。今は駄目だけれど、やってみればかなりすてたもんじゃない。ひょっとすると見込みがあるんじゃないかと、こんなようなことじゃないんです。全然見込みのないものが、やり直したらどうかなるんじゃない。人間というのはそういうところになか／＼立てん。だから人間というのはいつでも今度こそはと期待をかけるんです。いろ／＼悪い奴もおったけど、今度こそわとね。そういうように今度こそわというのが革命ですね。何遍人間が革命くり返してきたか。もう出来上ってみると幻滅と悲哀や。そうかといって諦めるかというところと又夢を描くのです。人間の上に夢を描く、希望を描く。その夢が幻滅と悲哀ということに終っていく。それでもなお夢を描いていく。

『正像末和讃』に、「三恒河沙の諸仏の 出世のみもとにありしとき 大菩提心おこせども 自力かなわで流転せり」というのがあります。三世諸仏のみもとにおいて菩提心を発したけれども、菩提心がかなわんで流転してきたと、こういう和讃です。菩提心を発したというのは夢を描いたんです。仏になろう、仏になろうと。だけれどもその夢が破れて流転してきた。流転を楽しんで流転しておるものはいない。流転が愉快というものはおりはせんのです。夢を描きながら夢も破れて流転するけれど、破れたら諦めようと、そのあきらめがつく程人間は偉大なものじゃないのです。絶望することも出来ぬ。絶望してやけくそということが絶望しとらん証拠です。絶望出来もんじゃないけど、夢と絶望との間に動揺しとるんです。

パスカルは人間というものを「中間状態」と言っています。弛緩と緊張との中間ということです。人間はもう遊んどれというてもよう遊ばん、寝とれいうてもよう寝とれん。何か働かんとすまんような気をおこすんです。気の小さ

いものやと思います。それなら緊張して頑張るかというところたびれるんです。緊張してもおれず、そうかと言って弛緩状態にもおれん。緊張と弛緩との間にたえず動いとる。だから中間状態と、うまいことパスカルはいったものです。それを人間にもつてくるというところと夢と絶望の間です。夢と絶望に泳ぐ。その夢と絶望とを一遍きりじゃない。無限に続けるから流転というんです。ほっとけば永遠に流転していったけど、流転の中であって流転を認めざるを得ない。けれどもいかにしてその方向を転ずるかという、そこに求道の問題がある。

流転というのが人間だ。たまたま人間の本質があるんじゃない。実相なんだ。こういうところに立っていて、その中にありながら自覚せんのです。だから夢を描く。夢を描くんだと自覚できん。夢を描きながら今度の夢だけは本当だと思う。流転がわからんから流転しとるんですわ。流転がわかるとそこに何か方向転換が出てくるんですけれど、流転だと思えんのですね。流転してきた、しかしこれからはと思う。そういう流転という世界に立場を置いて一切衆生をもつてわれとなす。それがわれなんだと。一切衆生を外に見ずにそれが自分なんだとする。

つまり一切衆生・凡夫ということは何かというと、凡という、平凡という意味だ。取り柄のない人間だということ。ちっとも偉くもないんだ、それが人間の実存です。そういう取り柄のない人間だということをやなかなか静かに安らかに受けねんのです。取り柄がないと思っても、ええくそと取り柄のないことに反抗しようとする。何の訳語だったか今思い出せませんが、衆生の中に自分を埋没することを表わすことばに放下ということばがあります。ハイデッガーのことばを翻訳して放下といった。あまりにも良すぎる言葉ですけど、まあ埋没でもいいのです。放下でもいい。一切衆生の中に自己を埋没するんです。肩いからして埋没するんじゃない。肩いからしても埋没出来ぬ。それで静かにというんです。

一切衆生をもつて自分に頷くんんです。これが人間の本質なんだという場合に頷けるんです。これがある人間の状態だと考えると頷けんです。そういうものが人間なんだと。今更びっくりするのは手おくれなんです。こんなひど

い奴だとは思わなかったという。そんなこと言わずに始めからこういうものだと思えば静かになる。静かなる心が如来の心です。如来がきばったりはせん。透明で鏡のような心です。映るままに、映ったのを見て自分を見る。自分以下の不潔な人間は映さんと、いいものだけしか映さんというんじゃない。それなら鏡にえこひいきがあるでしょう。如来の心だけが一切衆生となれるんだ。人間にそうなれというんじゃないんです。高い人間は低い人間になれんですし、低い人間は高い人間になれはせんのです。偉すぎて近寄れん人間は低くなれば屈辱を感じるんだ、そうでしょう。何も人間は人間になれません。如来の心だけがあるままに映すんです。人間が濁るとれば濁ったままにゆけるんです。人間が澄めば一緒に澄む。濁りをともにし、清浄をともにする。濁るのも平等であるし、晴れるのも平等である。

こういうような心というのは人間に求められん心でしょう。そういう如来の心が初めて衆生になるんです。法蔵菩薩は衆生になって初めて如来の本願を見出したんだ。本蔵菩薩が本願をたてて、その本願で我々が救われるということじゃない。法蔵菩薩自身が本願に救われる。法蔵菩薩が何故如来の本願に触れたかという、名もない人間になったからです。なんでもない人間というそこにおいて初めて如来の本願に触れる。如来のとついたらですね、誰れの願でもないという意味なんです。それで如来の願という。法蔵菩薩があって本願をおこしたんじゃない。法蔵菩薩になって本願を感じたんです。誰かの願じゃないんです。そういうのはみんな諸仏の願です。諸仏の願は各々の諸仏がおこしたんです。そうじゃなくて、誰れの願でもない如来の願だと、こういうのを法蔵菩薩は感得したんですね。感動したんです。

例えて言えば、海に泳ぎ出しとった。始めは自分の力で泳ごうとしとったんでしょ。頭を水の上に出して大洋を泳いだ。ふっと遇然に水の中をのぞいてみたら真暗や、それだけで泳ぐ力が消えてしまった。見た闇の中に吸い込まれていくんだ。水泳をやるとうこういう経験をもちますね。そうして泳ぐ力を放棄した時、さらにびっくりしたことは、自分を沈めようとした海が浮かばせとったんです。腕を漕いで沈むまいとしとった。実はそれは沈もうと

努力しとったんです。いかに努力しても沈めれんという大きな力を海に感ずるんだ。「いずれの行もおよびがたき身」というところに立って初めて、いずれの行も必要とせん本願に触れるんです。そういうように一つの感動をもって一心ということが成り立つとるんです。

そこで、「世親菩薩、大乘修多羅真実功德に依って、一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり。無碍の光明は大慈悲なり、この光明すなわち諸仏の智なり」（真宗聖典四六〇頁）とあります。始めにですね、「世親菩薩、大乘修多羅真実功德に依って、一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり」と述べてある。それは、「願生偈」では序文なんですけれども、この『入出二門偈』では本文なんです。しかも「願生偈」を解釈された解釈分というものも『入出二門偈』においては偈文にした。全部偈文になっている。『浄土論』では「願生偈」だけが偈文で、解釈分は散文なんです。そこに「入出二門」ということが出とる。「願生偈」の方は一心で代表出来る。解釈分の方は「入出二門」で代表出来る。入出二門というのは五念門です。五念門の行というのが入出二門という構造を持っている。入は自利、出は利他である。自利利他円満の行の五念門というのは解釈分に出とる。

だからここを考えてみるというと、解釈分は「願生偈」を解釈するんだから、例えば「観彼世界相 勝過三界道」といえば、それを解釈していくんだけれども、観とは何んだ、彼とは何だと解釈しているのじゃないんです。解釈分といっても一心を述べた偈文を解釈するんですから偈文のことばだけを註釈するんじゃない。一心のことばだから、ことばとなった一心です、それを解釈するんです。一心が一心自身を内観するんです。何かそこに一心のもっとる大きな意義を見出してきた。

入出二門というのは入出自在という意味です。入るのも自在だし出るのも自在です。非常に面白いと思いますね。物理学のことばですけれど、思想の上でも求心運動とか遠心運動とかいうことがあるんです。地球なんか運動する

とき、求心的に運動するか、遠心的に運動するか、こういうことを引力から言うんでしょう。人間の思想がどこまでも外に広がって世界になると、どこまでも自己に帰ってくる。どんな世界の問題でも、世界はどこにあるか、自己にある。自己を離れて世界はないんだ、こういうように自己に帰っていく。自己というのはただ個人というものじゃない。全世界というものに関係を持っている。求心的と遠心的ということは物理学のことばで適当ではないけれど、精神界というのを表わすのにそれを借りて言えば、ちょうどそういうことが入出でいいんです。世界に出ていくんだし、自己に入っていくんです。入出自在なんです。入が済んでから出、出がすんでから入というのじゃない。入の力をもって出ていくんです。出る力をもって入る。こういうものが行です。一心というのが行というような力を持っている。

ちょっと言うと「願生偈」は非常に大事だけど、解義分は散文だから格の落ちたものだ、天親菩薩にはいらんのや、何かの参考ぐらいにはなるだろうと思う。解義分は我々にはいるが、天親菩薩にはいらんだろうと。しかし我々の立場から言えば、一心というものの広大な意義というものも解義分です。初めて知ることが出来る。

天親菩薩の一心というのは、『無量寿経』の本願成就の経文に帰って見ると、下巻に出ています。その本願というものを人間の体験として表わせばどうなるか、それが「聞其名号信心欢喜乃至一念」というものになるんです。一念の信心です。信心の一念ですから、その一念といっても一念の信心という。信と念とは一つなんだけれど、『浄土論』では一心というんです。本願の方では信心を一念として表わしてあるが、「願生偈」の方では信心を一心として表わしてある。

一念というのは何か。時について言うんです。信心の時について言うんです。「万劫の初事」ということがあるでしょう。初一念ということ。初歡喜地ということも言います。流転しとるのも無始より已来流転し、また未来永劫にわたって流転しとる。我々の流転は始めも終りもないんだ。したがってそこに、法蔵菩薩の願心というものが、



始めと終りのない生死の中に自分を置くところというんです。置いた結果は始めも終わりもないんだけど、置く時には始めがある。我々でも無始已来流転しておるけれど、無始已来に目覚めるのは今始めてなんです。人間というのは本願のあるところに救われとったんだというけれど、始めから救われとったんだということも今始めて気がつく。今がないと自覚にならない。無始已来求めてきたものが始めて成就した。逆に言えば、無始已来流転してきたのが今日のためであった。今日の目覚めのために一切流転してきたんだ。一切流転せんような意味が今日あるんだ。ああ貴重なものだというわけです。我々が三界を経廻って流転してきたのは今日のためなんだと、こういう自覚でしょう。始めがある、ここに一念という字が表わしてある。信心を時で表わしてある。

ところが一心というの時なんだ。本質で表わしてあるんだ。一心にふた心ない、二の心ない心だと、これを本願の上を求めるなら、そこに本願成就としてあるわけです。しかし、入出二門ということは、たとえ『無量寿経』にもなかったことですね。三部経があってそれを薄めたのが『浄土論』じゃないんです。三部経の中であって、三部経の中にないことを明らかにしている。いってみれば、三部経が教えたんですけれど、教えられたというのは、教えられた以上のことを教えられてくるということです。これが始めて教えられたというんです。仏法というのは不思議です。世間では教える人が偉い人であって、教えられる人間は低いものだと考える。しかしそうじゃない。仏法では教える人は浅く教えても、教えられる人は深く受ける。これが仏法なんです。

師弟なんか一時の縁です。「深きは浅きなり」ということが法然上人にある。浅い、そこに深いものを見出して、世自在王仏という仏があって、世自在王仏という仏に魅せられて、法蔵菩薩が生れてきたんだけれど、そこに超世の本願というものを感得したんです。世自在王仏になかったような本願を感得したんです。世自在王仏の教えて法蔵菩薩が感得したんです。そういうようなところは面白いことです。だから先生に一生頭が上らんといい、そういう情ない話じゃない。そういうところが法界というんでしょう。

『歎異抄』に「弟子一人もたず」と書いてあるけれど、ああいうのが法界というんだ。なる程仏法の世界というのは悠々たる天地だと頭が下がるのです。それは弟子一人もない世界があるからです。そういう弟子一人もたぬ世界を親鸞は法蔵菩薩の精神をもって感得したんです。まあ言ってみれば弟子は持てんのです。それ程自分は偉くないんだと、そういう意味もある。弟子なんかもつ資格がないと、また持つ必要もない程、法界は大きいんです。持ってもせんし持つ必要もない。自分の弟子だと思ふから人を叱りつけたりするんです。自分の弟子だと思ふから我が弟子としてゐるわけです。弟子にし信者にするのです。何をうろろしておるか叱りつける。自分が弟子にしてゐる証拠です。しかし叱られるのは自分ですね。それで叱る人間は救われんです。叱られた人間は救われる。おことばのとおりとちゃんと機の深信へおいやられるのだから。叱る人間は救われず、叱った罰をいつまでも受けねばならぬ。仏法の世界は不思議なんだ。叱られて救われる。叱っていただいて始めて目を覚ますんです。叱られる方は何も別に損はないんでしよう。

信心は入出二門という意義を持っている。それによって一心は広大無碍の一心だということが証明される。解義分は付け足しというものではない。解義分があつて始めて一心が『阿弥陀経』の一心でなく広大無碍の一心であると我々に解つてくる。三部経に書いてなかつたことが『浄土論』にでている。三部経に書いてあることをもう一遍薄めるとではない。だから仏教からいえば、教えるということより教えを受ける責任は非常に大きいんです。先生の教えを薄めて受けとるのが弟子だといつたら、そんなに責任はありはしない。無責任なものです。そうでしよう。しかし大きな責任があるのです。仏法を興隆することは師も弟子もない共同の責任なんです。それに参加させられるんです。教えるとか教えられるとか、坊さんだとか在家だとか、そんなことは一時の話でしよう。つまりそういう一時の違いを宿業というんです。ただ宿業の場合に違つていふという話で、坊さんといつても教師といつても、偉い先生といふんじやない。偉いからなれるもんじやない、因縁和合でなれるんです。どんなに能力があつても人が買つてくれな

ければ偉いものにはなれんです。反対者も出てくる。それだから偉い人でも先生になり、またいい位置につくとは限らん。あんまり毒にも薬にもならん八方美人という人が偉い位置につくんです。あんまり憎まれ口を叩いていると偉い位置には立てれんのでしょう。これはみんな宿業ですから、そういう役割が当たったというだけの話です。成功したとか失敗したとか、上だとか下だとかいうのは問題でないんです。話は、法界というものから目を開くのなら、それは本願海の波乱にすぎない。高い波、低い波があるだけで、波がお前よりも高い波だと言っても話にならぬ。低い波は低い波という位置において大海を輝かし、高い波なら高い波において大海を輝かす。平等です。自分の分に満足して大海という大きな満足を見出す。小さい波は小さいところにくやしがらずに、それを縁としてそこに広い世界を見出してくる。各人はもうどうなる必要もないんだ。そのままにおいて広大な世界が開かれてくるんだ。自分より変わったものになる必要は全然ない。それを宿業にまかせるという。宿業にまかせて、宿業に逆らわずに、それを越えて、宿業を超えた本願に眼を開く。それが急ぐべきことなんだ。そういう急ぐべきことを抛っておいて、どうにもならん宿業をどうかしようと考えるんです。とんでもない妄想ですわね。

『入出二門偈』では「願生偈」の偈文だけが偈文じゃない。解義分まで偈文にしてある。「願生偈」では序文、本文、結文から出来ていたけれど、『入出二門偈』ではそれを全部本文にしてある。「帰命尽十方無碍光如来」というのは、文章の形式からいうと序文なんです。帰敬序という。しかし親鸞が一心の華文と言った時は、序文だけが一心じゃないんです。全体が一心です。

一心のほかに何物もない。そういうのを唯識でいえば唯心法界、唯心の教学です。一心というものは、ただ自分に主観的に閉じ込もっていいない。一心は信心だけど、そうかといって小さい、わしの信心だという我執・我見ではない。仏教では我見のことを我所有というんです。我というものを立てて見ると、我以外のものは我の所有になる。自分と

いうものを世界の中におくと世界というものが私の所有になる。だから我所有というのは、我が弟子という私の所有としてある。我が所有したというのじゃなしに我所有という。わが弟子というのはただ欲深いという話しじゃないんです。そこに我見があるんです。法界の中に我見を入れるんですわ。自分というものを固執すると自分以外のものは自己の固執ということになる。もっているものを離すまいとするんだ。それで離れていくという憎むということになる。そういうような形で我が悩むんだ。また悩むのも我なんです。我がかつてに一切を我所有としたんです。所有してみたんだけど所有したものが絶えず動いとる。動くことによって我が悩むんだ。だから一心というものが入出自在に上にも下にも超えているんです。一心が一心自身を超えたんです。無限に越えとるんです、超えたものをもって一心が成り立っている。超えれば超える程一心が成り立っている。

たとえば尽十方無碍光如来でも一心を離れて如来があるわけじゃない。一心に応ずる如来なんです。だから一心というのは応の世界を持っているんです。光というものがあんなら裏に願がある。光は上に超えるけど願は下に超えている。上に超えているものは阿弥陀如来だし、下に超えるとるものは法蔵菩薩です。我が一心が法蔵菩薩や阿弥陀仏を持っているんです。われの外に如来があるんじゃない。如来をもっているんです。そういうところに一心が成り立つ。一心が一心自身を超えているんです。超えるときには自己を否定するんです。一心が我という自己を否定して超えるんです。自己を否定して如来にふれば、如来そのものがわれとなる。それで廣大無碍の一心ということが出るんです。

「信巻」別序に一心の華文と言われたのは、本願に対して一心をおこしたというんじゃない。本願そのままが一心なんだ。如来の心が私のうえに成り立っている。そのままが回向成就というんです。一心が一心として、本願が、如来の心が一心として成就されている。回向成就の一心なんです。そういう一心は誰が得ても平等なんです。それが非常に大事な点ですね。

また名号というのは何であるかという、回向されたもの、一心が名号をとおして回向されたのです。ここに「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来」というのが名号でしょう。南無阿弥陀仏ということ。だから一心を表明して南無阿弥陀仏という。南無阿弥陀仏というものを目を開いた。一心の当体が南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏というところに本願が成就している。向うに南無阿弥陀仏というものを置いて、それに我々が一心というものを加えたのではない。南無阿弥陀仏として一心が体験されたんです。一心というのは南無阿弥陀仏の体験なんです。心というけれど、心を超えとる。南無阿弥陀仏といえ法でしょう。仏法、本願の名号という。本願の名号は単なる名なら阿弥陀仏という。南無阿弥陀仏という南無がついている。南無阿弥陀仏というのは我れに来た如来なんだ。向うに阿弥陀仏があってそれに南無するんじゃないんです。山口益さんが『動仏と静仏』という本を書いていた。静仏と動仏、静かな仏と動く仏、いかにも非文学的な名前だが、道元禪師であれば行仏という。仏になりつつ行く。仏が別にあるわけじゃない。仏に成りつつ行くという、これは面白いことばですね。例えば進行形ということがあってingという字をつける。これは独語にはない。英語にはingという。goingというような進行形ですね。独語にはgehenということがあるけれど進行形というものはない。便利なことばですね。仏が出来あがったのではない。仏に成りつつ行くという。だから名号というのは行となった仏。歩く仏。我々のところに歩いてきた仏です。本願の運動ですね。そこに生きた仏がある。動かんのを理というんです。理は動かんのです。行きもせんし、来たりもせん。しかし理を否定して行というんじゃない。行かずに行く。来たらずして来ている。だからして理が行じとるんです。道理が行じとるんです。南無阿弥陀という理が行じている。そういう道理に救われるんです。仏さんという人に救われるわけじゃない。

「正信偈」の一番初めに「帰命無量寿如来 南無不思議光」と、まず南無阿弥陀仏ということがでている。まず名号をかかけて、これから信ずるといふんじゃない。名号をかかげ、その名号をもって信心を表明する。これが私の信心という。信心に名号をたてるんじゃない。名号をかかけてそこで信心をたてる。南無阿弥陀仏の他に何物もない

と決定がついたのが信心です。それをここに一心と表明したのです。だから、心というけれど、心が心を超え破ってるんです。心が本願に解消しとるんです。解消しているのを疑いなしという。疑蓋無雜という。自分というものをこっちにおいて、名号を向うにたててそれを信じようとしたらいつまでたっても疑いでしょ。名号になったとき自己は解消している。自己の主観を破って名号の中に自己が解消している。それを疑いなしという。信じるという心を考える。と観念論です。主観を破って名号になったのが本当の意味の心です。

「願生偈」ではですね、始めに帰敬序というものを述べて一心帰命を述べ、次に「我依修多羅真実功德相説願偈捨持与仏教相応」と第二行が出ている。ところが『入出二門偈』ではこれを逆倒していました。「世親菩薩、大乘修多羅真実功德に依って、一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり」と。「世親菩薩」といわれるのは「我依修多羅」の我れを翻訳したのです。世親自らが我れというのです。「我依修多羅」と世親自ら言うから、それを親鸞から言えば「世親菩薩、大乘修多羅真実功德に依って」とこうなる。「願生偈」の二行目を『入出二門偈』では一行目に回わして置き換えたんです。順序を逆倒したのです。

しかし、順序を逆倒してあるというだけではない。世親菩薩は「私は修多羅に説かれてある真実功德の相、あるいは真実功德の相を説きたまえる修多羅に依って願生偈を作った」とこう言った。依というのは、これは「浄土論」では説の依だという。「願生偈」を作る場合に何もなしに作ったのではない。經典に依って作った。『論』の背景には經典があるということです。經典に相応せんがために「願生偈」を作った。そうして經典の事業を完成するんだと。經典から生まれて經典の事業を完成するんだと、こういうことがある。だから依ということが根拠ですが、説ということの根拠として依とかいてある。ところが親鸞は、「世親菩薩は、大乘修多羅真実功德に依って、一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり」と言う。一心に帰命したまえりと、そうでしょう。「願生偈」を説いたのが一心です。一心を述べたことばが「願生偈」です。一心によって「願生偈」を作ったといってもよいけれど、しかし今は製

作したというんじゃないのです。普通では第二行を發起序というんですから、『浄土論』を何故作ったかという意図、動機を述べるんです。何故「願生偈」を明らかにせねばならなかったか、『無量寿経』によって『無量寿経』の事業に相応し、そしてその意義を完成するために作るんだ、こういうことです。今は發起序という意味じゃないんです。だから逆にして「修多羅に依つて帰命した」ということです。もっと直接的に言うなら、帰命するような偈文を作ったというよりも、『無量寿経』の教えによって無碍光如来に帰命することが出来たと、こういうように「依」という意味が帰命の依とされる。「一心に尽十方不可思議光如来に帰命したまえり」の帰命ということばは南無ということばと同じです。何かそこに本願招喚の勅命ということがある。南無はかつてにこっちが南無するんじゃない。本願に來たれという、それにふれるんです。本願に來たれという勅命に歸したんじゃない。歸たれということばに我々が行ったんだ。我々が帰命するのが勅命なんだ。向うのどこかに勅命があつてそれに帰命するんじゃない。帰命することが出来たのが勅命なんだ。

つまり我々が南無するということが本願の働きなんだ。名号が行じとるんだ。一心帰命というのが南無阿彌陀仏の働きなんです。如来を向うに置いて、來たれという勅命を聞いて、はいそうですかというんじゃない。我々が返事出來たのが勅命なんです。生ける勅命です。本願の勅命が我々の上に行じているんです。だから南無阿彌陀仏のなかに疑心がないのです。南無阿彌陀仏に対して心をおこす、そんなのんきなものじゃない。そういうように何か本願にふれた体験がそこにある。自覚です。一心帰命というのは体験だから、南無阿彌陀仏を体としてそこに一つの自覚をあらわしている。それが出來たのは教えによるんだ。これが大事なことです。教えなしに一心帰命したんじゃない。それでどうしてもね、世尊ということと、尽十方無碍光如来ということと二ついるんです。世尊は發遣の教主、如来は招喚したもう如来、この二尊です。どちらもことばですね。修多羅というものも世尊の説かれたことばですし、世尊の教言です。それから帰命ということばです。我が國に來たれ、我が國に生まれんと欲えとは本願のことば

です。もっといえば魂のことばです。こういう二つの言に依って信心が成り立っている。

(本稿は、昭和四十九年七月五日、岐阜県慈光会主催の『入門二門偈』の会における講義の筆録を整理したものである。文責 編集部)

執筆者住所が掲載されているため  
リポジット非公開とする。